



校長から宗高・宗中のみなさんへⅡ ③⑧

令和3年3月12日（金）

「3・11 あの日から10年」

10年前のあの日夕方、学力検査の採点業務を終えて会場から出てきた時に、同僚から「東北の方でとんでもない地震が起きてるよ！」と聞かされたことを今も鮮明に覚えています。その後の報道で、刻々と被害の状況がわかるたびに災害とその被害のあまりの大きさに衝撃を受けました。

昨日は東日本大震災から10年目の「3月11日」でした。10年前の2011（平成23）年3月11日14時46分、三陸沖を震源とする国内観測史上最大（1900年以降、世界で4番目の規模）となるマグニチュード9.0の巨大地震が発生し、高さ30メートルを超える大津波が人々の命と街をのみ込みました。その甚大な犠牲と被害は、死者1万5,900人、全半壊した家屋は40万5161棟、被害総額16兆9千億円にも上ります。

あの日から10年経った今なお、行方不明者は2,525人、避難生活の末に衰弱や自殺等によって亡くなった「関連死」も3,775人に達しています。（警察庁3月10日時点まとめなどによる。）10年の月日を経て、つい2,3日前に身元が判明した御遺骨もあります。

あらためて、震災によって、あるいは震災に関連して亡くなられた約2万人の方々とその御遺族に対し、深く哀悼の意を表しますとともに、被災された方々にお見舞い申し上げます。

また、福島県双葉町にある東京電力福島第一原子力発電所は、地震によって発生した大津波による浸水によって全電源喪失の結果、原子炉3基がメルトダウン（炉心溶融）を起こしました。その時の水素爆発によって原子炉建屋は崩壊し、事故評価「レベル7」（1986年のチェルノブイリ原発事故レベル）で、世界最悪レベルの原発事故となりました。東京オリンピック招致活動において、当時の安倍晋三首相は福島第一原子力発電所の放射性物質は「アンダーコントロール」であると明言し、安全であることを世界にアピールしましたが、福島第一原発からは10年経った今も放射性物質が出続けています。さら

には原子炉から放射性物質が含まれた汚染水が出続けており、その汚染水は福島第一原発敷地内のタンクに貯蔵され続けています。原発から出続ける放射性物質による汚染のために、福島県の7市町村には避難指示が出され、帰還困難区域約340平方キロは今も継続し、3万5,000人以上の人々が避難継続を余儀なくされています。昨年4月以降、新たな避難指示の解除もありません。避難指示が解除された地域では帰還する住民も少しずつ増えてはいますが、福島第一原子力発電所のある福島県双葉町は全町が帰還不可能な状態のまま、7,000人以上の町民は一人も帰還できていません。双葉町は住民が一人もいないゴーストタウンと化したままなのです。

昨日、被災者の一人は「たった10年しか経ってない！」と話されていました。また別の被災者は「私たち被災者には震災から10年目と言われても『節目』などないです。」とも語っておられました。

私たちも東日本大震災による大津波や原発事故がもたらした信じられないほどの深刻な犠牲や被害についてはよくわかっているつもりです。そして非常に深刻に受け止めています。しかし、現地で実際に被害にあわれた方々、御家族や親戚を亡くされたご遺族、友人知人を亡くされた方々、今なお自宅に戻れず避難生活を余儀なくされている方々、そんな人々の気持ちは当然ながら私たちのそれとは到底比べ物にならない複雑で深いものであり、それは私たちの想像を遥かに超えるものであることは想像に難くありません。

大津波が襲いかかってきた時の恐怖たるやどれだけのものであったでしょう？

津波に肉親を奪われ亡くされたご遺族の哀しみはどんなに深いものであったでしょう？

津波に押し流され何一つなくなった街を見た時の気持ちはどんなものだったでしょう？

何もかも奪いさった地震や津波、原発事故に対する持って行き場のない怒りは？

そんな深い哀しみや苦しみ、怒りが何万通りもそこにはあったはずですし、それは今もきっと変わることはないはずです。

被災地から遠く離れた九州の地で生活する私たちは、大震災から10年目のこの機会に改めて、ひとごと他人事としてではなく自分のことに置き換えて様々なことを想像しなければならないと思います。

親や子供という身近な肉親を亡くされた御遺族の思い

今もなお御遺体すら発見されないままの方の御家族の思い

10年経っても自宅に戻ることをできず避難生活を続けることを余儀なくされている方の思い

震災や原発事故で生活の基盤を失われた方の思い

衰弱死や自殺といった「関連死」によって亡くなられた方、その御遺族の思い 等々

昨日の「東日本大震災十周年追悼式」において天皇陛下は「2月には福島県沖を震源とするマグニチュード7を超える地震が発生しました。この地震は東日本大震災の余震と考えられており、このことから、震災を過去のこととしてはではなく、現在も続いていることとしてとらえていく必要があると感じます。」と述べられました。

私たちひとり一人も、犠牲者やご遺族、被災者の方々のお気持ちや思いに、自分のことに置き換えて真摯に思いを馳せなければならないと思うのです。これからも犠牲になられた方々やそのご遺族、被災者の方々に対して、真摯に思いを馳せることによって「心を寄せ」続けたいと思います。

また、東日本大震災や福島第一原子力発電所の事故を通して、私たちが考え、備えなければならないことも多くあるように思います。

私たちが居住する福岡県にも、2005（平成17）年3月に西方沖地震を起こした「警固断層」をはじめ3つの断層が存在しています。これらの断層が30年以内に地震を発生させる確率もかなり高いと言われていています。また、南海トラフ沿いの巨大地震の懸念も大きくなっています。そういう意味では、福岡県に居住する私たちにとっても、東日本大震災は決して他人事なんかではなく、私たち自身の大きな問題でもあるのです。それに対する防災やひとり一人の備えは万全でしょうか？ かくいう私自身も恥ずかしながらまだ十分な備えはできていません。

また、玄海原子力発電所は本校からは約105km、福岡市からは約70kmの場所に位置しています。福島第一原子力発電所の事故から原子力発電所被災時の安全性の問題、そして電力をはじめとする私たちのエネルギーに関して生活をどうしていくべきかといった問題等、私たちに問われている課題は決して少なくはありません。

10年目の東日本大震災は、今現在の私たち自身の問題でもあることを忘れないでいたいと思います。

校長 深瀬 信也